

現代の心理療法における「コミット」をめぐる諸相について

北原 知典¹⁾

Aspects of 'commitment' in modern psychotherapy

Tomonori KITAHARA

要 旨

近年、心理療法で出会うクライアントは、神経症的な構造が明確でないクライアント、いわゆる発達障害および「発達の非定型化」と言われているクライアントが多く、その際には「コミット」という言葉の意味にも含まれるように、セラピスト側から、クライアントの主体がより明確になるように意識しながら能動的に関わっていく必要がある。今後、ネット化、IT化により社会が多様化していくにつれて「コミット」すること自体が難しくなることが予想されるが、それゆえにより我々、心理療法家は心理療法における「コミット」という言葉に意味について、個々の臨床ケースに立ち戻り、考えていくとともに、「個別性」に注目する必要がある。

ABSTRACT

Recently, many psychotherapy clients show the tendency to have unclear neurotic structures, such as “developmental disabilities” or “atypical courses of development”. When meeting these clients, the therapist needs to be actively involved in bringing out clearly the client’s subjectivity, and to be conscious of the client’s understanding of the meaning of the word “commitment”. In an increasingly diverse society, and due to the rapid evolution of the Internet and IT, it is expected that clients may find “commitment” more difficult. Therefore, psychotherapists need to look back to individual clinical cases, and focus on “individuality”.

1. はじめに

先の論文（北原，2019）にて、筆者はユング心理学におけるイメージについて説明する際に、『シュレーディンガーの猫』の実験を例えとして引用した。『シュレーディンガーの猫』とは量子論に対する反証として提示された思考実験である。

ユング（Jung, C.G., 1975）が、「言葉やイメージはそれが明白で直接的な意味以上の何ものかを抱合しているときに象徴的なのである」と述べているように、イメージの見方を固定してしまうと、それは記号と化し、イメージの持つ生き生きとした可能性が失われてしまう。筆者は、この量子論の「箱を覗いていない状態では生きてもいるし、死んでもいるという両方が重ね合わさっている状態であり、覗いて観察した瞬間に結果が収束する」という性質が、ユングの述べているイメージの特性に似ているのではないかと感じていた。

その後筆者も現場での心理療法面接、教育分析の経験、臨床心理士および公認心理師を目指す学生の実習指導に携わるなど様々な経験を積んできた。また、出会うクライアントおよび指導する学生の「こころ」のあり様も時代とともに変化し、神経症構造を持つクライアントが減る一方で、河合・田中（2016）が「発達の非定型化」と表現する明確な「こころ」の構造が想定しにくいタイプに出会うことが多くなった。

これらの変化に伴い、筆者にとっての『シュレーディンガーの猫』の実験の例えも変化し、「イメージの持つ多様性、多元性についての説明の例」としてよりも、クライアントやイメージ等、何かに「コミット」する際に生じる、「何かが形になることを覚悟のうえでこちらから能動的に関わろうとするセラピストの姿勢」を説明するものと変化した。

また、『シュレーディンガーの猫』の思考実験において、対象物を箱の中にしまい、直接触れるのではなく、外から「見る」という形で関わっていくあり方も、包まれていた神話的な世界や自然から、切り離さ

¹⁾ 放送大学准教授（公認心理師教育推進室）

れて内在化、個人化することで誕生した近代意識や心理療法の発生と類似のあり方とすることができるのではなかろうか。心理療法とは、一定の構造を持つ日常とは切り離された面接室という箱（空間）の中で生じるセラピストとクライアントとのイメージを介した相互的・共時的な作業と言える。しかし、現代はその影響し合う土台となる内面性や共有するという感覚が薄く、より意識的に「コミット」しないと治療自体が困難となる印象を持っている。

本論文では、定義として曖昧である自分の「コミット」という感覚をできる限り言語化するとともに、現代のこのころのあり様についても、「コミット」という言葉をキーワードにし、考察したい。

この「コミット」という言葉は心理療法に限らず、一般的に使用されており、明確な定義がないように思われる。最近では第3世代と言われる認知行動療法の一つであるアクセプタント&コミットメント・セラピー（Acceptance and Commitment Therapy）が想起されることも多いのではなかろうか。この療法において、「コミット」を一つのプロセスととらえる視点は本論と同じであるが、この療法は具体的に目標を決め、その目標に向かって実際に「コミット」させるものであり、ユング心理学のように神話や夢等のイメージへの「コミット」は含まれていない。

また、ユング心理学では村上春樹の物語をテキストにし、現在の心のあり様や心理療法のあり方を読み解く書物が多くあり、「デタッチメント」および「コミットメント」という言葉が登場する。河合（2011）が指摘するように、村上春樹の物語には近代意識、ポストモダンの意識等をめぐる現代に生きる私たちの「このころ」のあり様が描かれているように思われ、本論文での「コミット」について考える際にも参考となる。

2. 夢分析体験から見た「コミット」について

筆者が前述したこの『シュレーディンガーの猫』において、観察することで一つの形に集約されるように能動的に関わっていく姿勢—この姿勢を筆者は「コミット」という言葉で表現しているが—を意識するようになったきっかけは自身の夢を通した教育分析体験によるところが大きい。

まず、分析の過程で「コミット」について考えるきっかけとなった2つの夢の概略を順次提示しながら、以下に述べることにする。ただし、夢1については、すでに述べた内容となるため詳細については割愛する（北原，2019）。

夢1 洞窟から出るとそこはうっそうとした竹藪で囲まれており、「出られない」と思う。

この夢は教育分析を開始し、少し落ち着いてきた頃に見た夢である。この夢を見た時、筆者は単純に「洞窟」「竹藪」の意味や連想、「出られない」ことの意味を考えていた。しかし、バイザーは、「竹藪から出ようとしなかった」という夢見手である筆者の夢の中の姿勢について言及したのが非常に印象的であった。

当初、筆者はどこか夢に対し、一種テレビを観るような受け身の姿勢、言い換えれば傍観者であり、関与しようとする主体的な動きが弱かったと言えよう。河合（2013）は「夢などのイメージが単なる個人の心として内面ではなくて、それ自体が世界を持っているものであって、その世界に積極的に、そして方法論的に包まれようとするからこそ、イメージのインパクトによる変容や治療が可能になると考えられる」と述べており、筆者の考えているところの「コミット」という感覚を的確に表していると思われる。

人がまだ神や自然という「大きなもの」に取り囲まれていた時代であれば、メッセージを受け取るだけで何かしらの変容が生じたと思われるが、後述するように、現代は「大きなもの」から切り離されている時代であり、傍観者的な関わり方では変化は生じず、自らが主体的に関わっていく姿勢が必要となるのであろう。

「シュレーディンガーの猫」の思考実験を引用して例示したように、量子論によれば原子等ミクロの世界は、観察した際に一定の確率で特定の姿を我々に見せてくれるが、観察していないときの様子はまさに重ね合わせの状態であり、実際の様子を見ることはできない。この観察したときに一つの形に集約される現象は、まさに1回生の出会いの妙と言える。心理療法における面接の結果、イメージがある形に具現化および固定化されることになるが、セラピストが主体を持って関わる以上は、それは必然的に生じることであり、避けることはできない。先の論文でも言及したが「コミット」という言葉には、「責任を負う」「のっぴきならない状況に身を置く」という意味が含まれているように、臨床上のある種の覚悟が伴う（北原，2019）。

夢2 古い石造りの建物が並ぶ街の中心にコンクリートでできた四角い貯水池がある。その貯水池には岩や草、そして崖もあった。囲いの中に入り、高い崖の上から貯水池の中に飛び込む。

夢2で筆者は、自然が外側ではなく、建物やコンクリートに囲まれた内側にあること、垂直的な動きを含む行為（飛び込む、潜る等）が海や川という自然の中ではなく貯水池という人工物の中で行われることに対して疑問を感じた。それに対し、バイザーは、人間を取り囲んでくれるような神や自然が存在した世界、自分を守ってくれるような存在に取り囲まれた世界からは既に切り離されているという、このころのあり様について言及した。

この時、筆者の中に「ノスタルジー（nostalgia）」

という言葉が自然に連想された。「ノスタルジー」とは、ギリシャ語「nostos (帰郷)」と「algos (心の痛み)」を合わせたスイスの精神科医であるホーファー (Hofer, Johannes.) の造語であり、そこには「痛み」というものが含まれている (デーヴィス, 1979)。この夢の説明にあった「自然や共同体、家族などに取り囲まれている」「取り囲まれたままでいたい」という感覚は単なる「nostos (帰郷)」という懐かしさにとどまらず、すでにそこにはないもの、手に入らないものとしての「algos (心の痛み)」を伴う。現代の神経症とは、失ったという痛みを回避し、「nostos (帰郷)」の部分に留まることで生じる一種の不応状態であり、それは個人分析に対して抵抗する筆者自身の姿と思われた。

ユング派の分析家である、ギーゲリッヒ (Giegerich, W., 2000) はオケアノスにおける体内循環 (血液循環) への転換という出来事の近代的な意味について言及している。オケアノスとは人々の世界を取り巻いていたギリシャ神話に登場する河であり、人々はその河にバンドとして取り巻かれて恩恵を受けて生活していた。しかし、1628年に個人の体内にある生物学的な血液循環の流れが発見されたことで、そこにコペルニクス的な転換が生じ、人々を外側から取り巻き、結びつけていたバンドは人の内側に潜り込み、人は世界から解放され、個人として生きることが定められたと指摘している。

オケアノスの河が個人の体内の血液循環に転換された以上、取り巻く世界からの神託を待っても意味はなく、個人が内側へと意識的に「コミット」していく必要が生じる。夢1でも述べたが、夢に対し、傍観者になるということはこの「大きなもの」からの分離を否認し、神経症的に「nostos (帰郷)」にとどまり続けることに他ならない。言い換えるならば、夢とは「神託のように降りてくるもの」ではなく、今や自らが主体的に関与しなくてはならないものに変化してきたとも言えよう。「コミット」とは、この「nostos (帰郷)」の神経症的な意味に気付き、「大きなもの (オケアノスの河)」から切り離されたゆえの「algos (心の痛み)」を身に引き受けて主体的に生きていく姿勢でもある。「ノスタルジー」は芸術を含めた創作においては想像力の源泉となるものではあるが、それは既に失い「algos (心の痛み)」を体験しているからこそ、創造的に働くのであり、否認したままでは働かない。

このことを考えると、『シュレーディングの猫』の実験で筆者が最初に言及した、「一定の形に集約させずに、多元的・多義的な状態のままで置く」という姿勢は、「nostos (帰郷)」に留まる神経症的な姿勢を顕現しているのではないかと思われる。

一方で、すでに失っている事実気づくためには「神経症的」に「nostos (帰郷)」の段階にとどまり、一種の葛藤状態というか、終わりのない循環に身を置かなければ起らない。この循環にとどまり続けるこ

と自体が「コミット」の過程であると考えれば、「コミット」の中には「さらなるコミット」が含まれることになり、一様ではない過程と考えられる。

しかし、振り返ってみるとこの「コミット」という姿勢は、真新しいものではなく、基本的に臨床家としてクライアントに向き合う場合には、必然的に生じるものでもある。河合隼雄 (2009) は、心理療法のモデルについて「自然 (じねん) モデル」という言葉を使用している。「自然モデル」とは言葉的には「コミット」とは遠い印象を持つ。しかし、このモデルに対して河合が説明しているところの、「タオの道に外れていることを感じる」、「タオの道に戻るよう存在する」という行為は、意識的に「コミット」する姿勢がなければ生じない動きであろう。また、東山 (1982) の遊戯療法の本質を示した「牛の訓練士」の例え話も、セラピスト自らが牛と歩く、自らがすきをかける等やはり意識的に「コミット」する姿勢が含まれている。

3. 川上未映子の『ヘブン』から

ここでより具体的に「コミット」についての筆者の考え方を示すために、川上未映子の『ヘブン』をテキストに考えてみたい。この話は思春期・青年期の時期に顕在化する一種の悪意や残虐さ、もしくは「いじめ」との関連で取り上げられることが多い。それらは現代における一つの問題点だと思うが、ここでは主人公の「斜視」に注目する。

主人公は中学生の男子だが、学校では人気者の男子を中心としたグループから壮絶ないじめを受け、自分を殺し、人との関わりを持たずに生活をしている。また、家族も父と何の前触れもなく現れた継母との三人の生活であり、同居はしているが深い関わりを持たずにいる。しかし、ある時ふで箱の中に入っていた手紙を通して、いじめられている自分と似た境遇にあるクラスメートのコジマという女子と交流を持つようになる。手紙のやり取りを続ける中、段々と二人の間で心の交流が生まれ、今まであきらめていた居場所を二人の世界に見出ししていた。また、主人公は「斜視」であり、その「斜視」があることで自分は醜く、いじめに合うと考えていた。コジマは主人公が嫌う「斜視」を自分が一番好きな部位と伝え、特別なものの証として感じていた。

しかし、コジマとの関わりの中で自分の生きる意味を得た主人公は段々といじめられることが苦痛となる。ある時命にかかわるようないじめを受け、主人公は病院へ行き、そこでいじめの中心メンバーである百瀬という男子生徒に会い、初めて自ら「なぜ、こんなことをするのか」、「自分が斜視だからだろう」と声をかける。しかし、百瀬に別にいじめの対象は誰でもよいこと、「斜視」なんて関係なく、たまたま主人公だったということ、告げられ、ショックを受ける。また、同じ日に病院の医師から「斜視」が手術で簡単に

治ることを知らされる。この後、「斜視」が治る」という事実をコジマに伝えたことで、コジマとの主人公の関係にはつれが生じる。最終的にはある出来事によりいじめが明るみに出たことで主人公はコジマという存在や居場所を失う一方、そのことがきっかけとなり、主人公はすべてを継母に語り、「斜視」の手術を受けることを選択し、新たな人との関わりの中に生きていくことになる。

この小説に出てくる「斜視」はいじめられる原因として、一種のスティグマとして主人公に位置付けられていた。主人公は自分の現在の状況を「斜視」という症状に集約し、「斜視」を中心とした「物語」を生きてきた。

「斜視」は一種神経症の症状のように主人公に存在意義や生きる証、そして時にはコジマと共有する「物語」として機能していた。しかし、それがいじめの中心メンバーである「百瀬」や医師にその特別性を否定されることにより、いじめは顕在化し、主人公は新しい母親との関係を結び、「斜視」の手術を受けることを決心する。そしてその代償はコジマとの別れであったと言えよう。このように「神経症」的なものは、痛みを残しながら、消失することが大事なのであろう。しかし、一方で「斜視」に神経症的に留まることで、コジマという存在を得て、生きる希望や主体性が生まれる萌芽になったことを考えるとやはり、「神経症」的にとどまり続ける、そこに「コミット」していく動きは不可欠と言えよう。

この小説を題材に読み解いたように「コミット」には、例えそこに神経症的であってもとどまり続けること、そしてすでに失っていたことに気づき、その痛みを引き受けるという過程が含まれている。

4. 現代の「こころ」のあり様と「コミット」

「発達非定型化」と言われるクライアントが増えてきた背景、心理療法の困難になってきたという背景には、ネット化、IT化等我々が生きる社会が多様化してきていることと関係している。ネット化やIT化が進む現代では、この喪失や痛みが個人や社会の中で解離している面があり、前述した「コミット」自体を困難にしている面があるのではないだろうか。

1) ネット社会化における新しい自己像

武田(2006)はWebが社会に浸透する過程において生じる課題として、個人のアイデンティティのあり方およびその統合性が変容することを取り上げている。Webの浸透は、社会が複雑化する中で共同体から分断されてきた個人をさらに実空間からも切り離し、結果として個人は複数のアイデンティティをそのまま持つか、もしくはある程度の一貫性を持たせるかという新しい自己像を形成するよう求められるという。また、それだけではなく、自由度の高い「Web空間上の自己」と自由度は低い実体性を持つ「実空間の自

己」との間で解離が生じ、二つの自己をどう維持するかも問題になると指摘している。

特に最初の指摘は、辻大介(2004)の「多元的自己」(複数のアイデンティティ)という見方と類似している。また、河合隼雄と村上春樹との対談(河合隼雄,1999)に登場する「フィールド・アイデンティティ」という、日本人の場面場面で合わせていくアイデンティティを表現した言葉とも類似しており、日本人的な心性も影響している可能性がある。

2) 反省や内省する機会の減少

鈴木(2005)は「ノンリニアなモードの個人化」という現代の意識について言及している。「ノンリニアなモードの個人化」では、社会という観点は抜け落ち、社会の代わりにデータベースを通して自分の立ち位置をその都度確認するという往復運動となる。したがって、確固たるアイデンティティや「本当の自分」というものは一時的なものであり、個人や個人の自己意識を支える確固たる根拠になりえなくなっている。鈴木が指摘するように、インターネットを使用していると自分の検索履歴から自分の興味があるものや、関心があるもの、好みは反映され、データベースから自分に合った情報が自動的にパソコン上に現れるようになる。それは便利な機能であるが、それらは内面を通していないために一種の記号として、変換可能なものとなり、相対的に自分の興味関心がある世界以外のもの—例えば「他者」、「異界」—と出会う機会は極めて少なくなると言わざるを得ない。

3) 共有可能な物語や場の喪失

宇野(2011)は「大きな物語」の喪失という言葉を使い、現在の若者について、「大きな物語」を喪失し、物があっても物語がない「弱い」面を有していると表現している。また、内面性を喪失したのは個人だけではなく、現代という時代自体に実体性、具体性はあるものの、それを内から証明する「物語」が喪失されており、その喪失感を埋めようとする動きがオウム真理教等「物語」類似の型を与えてくれるものへと内省・反省なしに繋がっていく可能性を指摘している。

また、前述した鈴木(2018)は「多孔化」という表現を使用し、共空間に居ながら、スマートホンによってその場にいない人たちとのつながりを気にするあり方について言及している。鈴木によれば、「すでに同じ場に過ごしていること=親密のコミュニケーション」となりえず、現実には穴が開き、スマートホンを通じて外から異なる現実が入り込んで来ているという。

速水(2009)は現代の若者の「大きな物語」を喪失したことによる仲の良い友人関係や趣味仲間など「小さな物語」に対する連帯意識が強化されてしまう傾向、個別化された中で「小さな物語」のフレームを生じている状況を読まなくてはならず、的確に読めているか不安になりやすい傾向について述べている。

実際にスクールカウンセラーとして全員面接をした

際に、今流行っていること、話題になっていることを若者に尋ねることがあるが、すぐに具体名が出てこず、お互いの顔を見つめながら、首をかしげて悩む生徒の姿に出会うことは多い。それは共有している感覚がよくわからないという戸惑いや個人的な好みを出して良い場かはかりかねている様子にも見え、この事からも多様化した現代の難しさが垣間見える。

そして、この「小さな物語」の個別化および状況の読めなさは、反転して自分自身にも向かい、自己感や自分という感覚の希薄さに繋がる。人は「他者」のまなざしや自分とは異なる「他者」との関わりの中で「自分」を体験していくものだが、この「体験」するだけの自我が育たないままの状態に戸惑いを感じている若者は多い印象を受ける。

我々臨床家は、基本、構造化された面接室での実際の場合やイメージ、物語の共有等関係性を重視しているが、この前提となる基盤が弱いクライアントに出会うことが多くなったという現象は臨床を行う上で考えさせられる事実である。

しかし一方で武田(2019)は「社会としてのWebから生まれる新しい課題」の一つとして、新しい「もの」の存在のあり方を指摘している。武田によれば、「もの」は今後、デジタル的に存在するものが含まれるようになり事空間上での存在が付加物となることであること、Web空間には実空間の法則にもとづく仕組みは適応困難あるいは提供不可能となる可能性があるという。もし、個が自然や共同体から切り離されることで、近代意識という新しい意識が誕生したのであれば、Web化によって実空間での実態や仕組みからある程度の自由さを得た空間の中で育った場合、人々の中に新しい意識が生まれる可能性を秘めているとも言えるのではなかろうか。

5. 臨床を通して見た現代の意識のあり様

筆者は臨床経験を教育分野で積み重ねてきたが、母子並行面接の変遷からもこのような流れを読み取ることが可能と思われる。筆者が臨床を始めた当初はまだ母性神話が生きていた時代であり、相談に来るクライアントはたいてい母親であり、父親が相談場面に現れることはまずなかった。また主訴も子どもの問題でありながら、そこには「自分の母親関係が影響を -」「自分の接し方の問題が -」など罪悪感や葛藤があり、母子を切り離して考えられないケースが多かった。

しかしそのうち、徐々に様相が変わり、葛藤や罪悪感をもって来室する母親は減り、子どもの問題は子ども自身の問題であり、親は関係ないという考えを持つクライアントが登場した。つまり、親の接し方が子どもに影響するとは考えない、ある意味デタッチ的な関係性を持つ親子も現れるようになった。最近再び「育て方が子どもに影響する」という意識での相談が

増えてきたが、その場合にも罪悪感や葛藤が根底に見られることは少ないのではないかと考えている。どちらかと言えば、子どもと「コミット」できないことから来るわからなさや不安によるものが多く、これも一種のデタッチ的な様相を呈している。この場合も葛藤やつながりがあると考えていないために、ハウツーの方法論、具体的な診断および心理検査等の数値を求める場合が多く、自分の主体的な子どもへの関わりが問題解決につながるイメージや実感が持てないでいる印象がある。

これは前述した鈴木(2005)や宇野(2011)の指摘にも近いと思われる。母性神話を顕現する母親、家族・会社のために自己犠牲を押しつけて身を粉にして働く父親、家族は子どもを第一に考えるものという物語は既に消費され、形骸化している。そして子どもとの影響し合うような深い関わりが体験しにくい中、子どもに生じた諸問題を自分たちと体験的に結び付けることは難しいが、原因不明という状況は不安で耐えられないのであろう。不安にラベリングできる言葉、情報を手に入れようとし、インターネットのデータベースから検索するかのように後付けで「母子関係の問題が影響する」というワードを見つけ、一つのストーリーとする場合も多いのではないかとと思われる。このように実体がない記号を実態があるかのように認識するのも現代の意識の問題であらう。

ギーゲリッヒ(Giegerich, W.G.) (2000)は歴史学に対し、後付けの歴史を史実化してしまうというその恣意性を指摘している。しかし、現実にはIT化が進むことにより、ビッグデータを利用して未来を予測する動きは増々強まるとされる。また、ニュース等では、ITの情報から個人の信用度を図る動きが社会的に広がりつつあることが話題となっている。それは、外から入ってくるものを無反省に取り入れ、それが一種自己像や自己感を形成していく過程とも言うことができ、これらの現実を考えると、「コミット」ということは、今後より困難になるのではないかとと思われる。

6. 「コミット」と心理臨床の実践教育

筆者はこれまで大学附属の相談室等にて、公認心理師および臨床心理士を目指す学生の実践教育に携わる機会を多く得てきたが、その学生の中にも、自分というまとまりに欠ける学生、前述した「発達非定型化」に含まれるであろう学生がおり、対応に苦慮した記憶がある。例えば、遊戯療法では子どもが物を壊す、セラピストを直接的に攻撃してきた際に制止する覚悟というか力も時には必要なのだが、この制止を説明すると字義通り決まりごとのように止めてしまう。本来なら、セラピストの中で止めていいのか、それでその子にどのような影響が生じるかなど内側で考えながら判断するものであり、それは一種の臨床感覚となり育つのだが、この感覚がいくらケースをもとに説明し

ても伝わらないことに困惑したことを覚えている。

このように心理臨床の世界は、言葉だけでは説明の難しい感覚的な部分も多く、ネットの社会化、IT化が進む社会の中で、この感覚をどのように伝えるかは意外に難しい問題と考えている。特に最近では新型コロナウイルスの影響により、対面での授業や指導を行うことが状況的に困難であるが、実質的な空間や場を共有せずに教育を行わなければならない状況下で、いかに実践的な臨床教育を行うかというテーマが突き付けられている。心理臨床は人の「こころ」を扱う実践的な学問であるということを考えれば、支援の現場や対面での感覚をほとんど体感せずに臨床家として学生を世に出すことには大きな抵抗がある。

前述したように、「コミット」とは一つの過程であり、過程である以上、社会的な変化が生じたとしても、「コミット」すること自体に変化が生じるわけではない。例えば、心理療法が時代とともに変化したとしても、クライアントがいる以上、セラピストがクライアントに向き合うという姿勢自体は変わらない。しかし、これまで論じてきたように、「コミット」するものは症状であったり、イメージであったり、その状況であったりと入れ子のように複雑であり、社会自体が多文化や解離、物語の喪失をすでに含んでいる以上、さらに一様でなくなることは想像に難くない。

しかし、心理臨床はその時々時代の時代や社会背景の中で育ってきた「こころ」を対象とする以上、セラピスト側もその影響から無縁ではいられない。逆に単純に変化に抵抗するのではなく、その状況に「コミット」をし、これまで当たり前と思っていた臨床のあり方をより意識的に問い直す必要があると思われる。

また、その意味で本学の通信制というシステムは、この時代の一つのあり方として検討する際の材料になるのではないかと考えられ、今後引き続き検討していきたいと思っている。

7. 終わりに—ポストモダンの意識と「コミット」について—

河合（2011）は村上春樹の小説を題材にポストモダンの意識について「近代意識の特徴である禁止やその結果生じる葛藤や罪悪感が認められない（中略）そのためにバラバラでありながら、思わぬものに直接的に遭遇する構造を持っていると考えられる」と述べている。したがって、前述した『ヘブン』の主人公の場合、「斜視という物語」や「スティグマ」を持っていることから、近代意識に近いものであったと思われる。一方、前述したように、発達障害および「発達の非定型化」と言われるクライアントに出会うことが多いという事実は多くの心理臨床家が指摘しているところだが、その特徴はポストモダンの意識との関連で語られることが多い。また、河合（2020）は「象徴の貧困化」について述べており、イメージが無意識との媒介物として機能しなくなっている現代の「こころ」の

あり様について述べており、これもポストモダンの意識の一つの特徴として捉えられる。

今後はこれらの特徴を持つポストモダ的な動きが強まることが予想されるが、その場合、「何に「コミット」すればよいのか」、「どのように「コミット」すればよいのか」という問いが生まれる。

前述したように、「コミット」するためには「コミット」する主体や自我の強さ、「コミット」する際に定点および媒介物となるイメージや症状等が前提となる。しかし河合が指摘するように「イメージの貧困化」やバラバラであったり、まとまりがはっきりとしない自己感を持つクライアントと出会った場合に、「コミット」とはどういう形をとるのであろうか。おそらくそのヒントは「個別化」にあると思われる。確かに「イメージの貧困化」により、これまで存在感を持っていた「死」や「誕生」、「通過儀礼」等のイメージが大きな転機とならないケースもあると思われるが、それはそれらのイメージが共有されないもの、言い換えれば記号と化しているからに過ぎない。しかし、それはイメージが無い訳ではなく、あまりにも個別化されているためであり、一人一人のクライアントと面接を重ねる中で、そのクライアントが個別に持っている生きたイメージや出会う場を提供できるよう、クライアントの個別性に私たちは「コミット」していく必要があるのではなかろうか。河合・田中（2016、前掲書）は「発達の非定型化」を呈するクライアントに対し、セラピストが主体をぶつけるかのように会う事の重要性を指摘しているが、これも一つの「個別性」に特化した動きだと考えられる。また、河合（2013）はポストモダンの意識について、バラバラゆえに関わりのない者同士が突然出会う可能性を指摘している。岩宮（2010）もネットの世界での突然の出会いや喪失が、その人個人の主体の立ち上げや、「自分」という気づきに繋がり、定点が生じることを事例をあげて示しており、これらの直接性を意識した指摘もポストモダンの意識における臨床のあり方と言え、参考となる。

この現代のイメージのあり様や「何に「コミット」すればよいのか」・「どのように「コミット」すればよいのか」という問い、そして事例にみられる個人化や直接性は、今後の検討課題と考えている。

引用文献

- デーヴィス, F. (1979): ノスタルジアの社会学 (間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳) (1990). 世界思想社.
 ギーゲリッヒ, W.G. (2000): 魂と歴史性 (ユング心理学の展開—ギーゲリッヒ論集) (河合俊雄編集・監訳). 日本評論社. 第三章
 東山紘久 (1982): 遊戯療法の世界—子どもの内的世界を読む—. 創元社. pp. 3-4
 速水奈名子 (2009): 現代社会における自己形成と身体—ゴッフマンのフレーム理論をもとに. 『文化の社会学 記憶・メディア・身体』 (大野道邦・小川伸彦編著).

- 文理閣. pp. 244-262
- 岩宮恵子 (2010): 『遠野物語』と心理療法—異界と日常, ネットとリアル. 『新潮2010. 7』. 新潮社
- ユング, C.G. (1975): 人間と象徴 無意識の世界 (上) (河合隼雄監訳). 河出書房新社. pp. 19
- 河合隼雄 (1992): 心理療法序説. 岩波書店
- 河合俊雄 (2011): 村上春樹の「物語」—夢テキストとして読み解く. 新潮社
- 河合俊雄編 (2013): ユング派心理療法. ミネルヴァ書房. p. 78
- 河合俊雄 (2016): 発達の非定型化と心理療法 (河合俊雄・田中康裕編). 創元社. 第1章・第6章
- 河合俊雄 (2020): 心理療法家が見た日本のこころ—いま、「こころの古層」を探る. ミネルヴァ書房. 第3章
- 河合隼雄・村上春樹 (1999): 村上春樹, 河合隼雄に会いに行く. 新潮社
- 河合隼雄 (2009): 心理療法序説. 岩波書店
- 川上未映子 (2009): ヘヴン. 講談社
- 北原知典 (2018): Commitするということ—シュレーディンガーの猫の仮設実験を題材に—. 東洋英和女学院大学心理相談室紀要2018 vol. 22. 東洋英和女学院大学心理相談室. pp. 86-95
- 鈴木謙介 (2005): カーニヴァル化する社会. 講談社現代文庫
- 鈴木謙介 (2018): ウェブ時代のコミュニケーション—<多孔化>した時代の中で—. 日本コミュニケーション学会誌Vol. 46, No. 2, pp. 117-129
- 武田英明 (2007): Webのこれから—情報の共有から知の統合へ—. 電子情報通信学会誌Vol. 90, No. 5, pp. 393-398
- 辻大介 (2004): 若者の親子・友人関係とアイデンティティ—16~17歳を対象としたアンケート調査の結果から—. 関西大学社会学部紀要第35巻第2号. pp. 147-159
- 宇野常寛 (2011): リトル・ピープルの時代. 幻冬舎文庫. pp. 94-101

参考文献

- 佐藤勝彦監修 (2001): 「量子論」を楽しむ本. PHP文庫
- スティーブンC.ヘイズ、マークD.ストローサル、ケリーG.ウイilson著 (2014): アクセプタンス&コミットメントセラピー (ACT) 第2版—マインドフルな変化のためのプロセスと実践— (武藤崇ら監訳). 星和書店

(2020年10月30日受理)